

令和7年度 第1回 岐阜市総合教育会議 議事録

1 日 時 令和7年5月22日（木）13時30分～15時30分

2 場 所 岐阜市庁舎 12階 第1・2研修室

3 出席者 柴橋市長、伊藤委員、岡本委員、小森委員、益子委員

4 招聘者 兵庫教育大学大学院 教授 川上 泰彦 氏

5 傍聴者 一般1名、報道関係者2名

6 次 第 （1）市長あいさつ

（2）協議

「誰もが価値ある大切な存在として認められる学校」

7 議 事

（13時30分開会）

（1） 市長あいさつ

（2） 協議

① 事務局説明

（資料2 誰もが価値ある大切な存在として認められる学校「岐阜市のいじめ対策の成果と課題」）

② 招聘者講演（川上 氏）

（資料3 「開く」「考える」学校組織づくり

「誰もが価値ある大切な存在として認められる学校」をどう実現するか）

③ 意見交換

○伊藤委員

川上先生のお話をお聞きしながら大綱を作った時の生みの苦しみ、臨時会まで開いて言葉を選ばずに直球でお話させていただいたことを思い出した。そして、いいものが出来上がりそこから色々なことに取り組んできた。そのうえで岐阜市の教育が出来上がってきたと思っている。ただその当時大綱を作る際に、理念の形骸化の恐れというのは私も感じていた。そのため、当初の「価値ある存在」から「価値ある大切な存在」という言葉に変えてくださいと言い続けてそれがかなったわけである。

こうした中で、先ほど歳藤課長からお話いただいた、3本柱の1つとなる教員の研修も行ってきた。事案を風化させないために主にいじめ対策を中心として行ってきたけれども、ただ先生同士が学んでいるだけではもう足りないのではないかとと思っている。これも言葉を選ばずに言わせていただくと、どうしても先生方は子どもとの関わりがずっと中心となっており、学校以外の社会経験がない方も多い。企業であれば顧客との関係性だとか、取引先との関係で培われるようなスキル、そういうものが養われていくが、それがなかなか先生方には難しい環境にあるということで、やはり民間の方を入れた研修というのも今後進めていただきたいなと思っている。たまたま、別の市町村で教職員向けの研修をさせていただいているが、例えば最初のステップとして、マナー研修もとても大切だと思う。例えば、子どもがもしいじめに遭ったとか不登校になったというときに保護者は学校に足を運ぶ。その場合、本来であれば学校側と保護者で子どものためにタッグを組んで動くべきことであるのに、先生と保護者の関係性が少しねじれてしまって、保護者が先生に対して偏ったイメージを持ってしまい、まとまる話もまとめられないというようなことが報告書でもよく見受けられると思う。それは根本的に、ファーストステップが間違っていることが多かったと思うので、相手が不快に思わないとか、相談して良かったと思ってくださるということがこのベースになっていくうえで、そこが今先生方の中にまだ足りないのではないか。現場でしか教えてもらえない中で、先輩たちからの前例踏襲のマナーでいいのかなと思いがちなことがあるので、もっとマナースキルなどもきちんとつけていただいて、先ほどおっしゃった風通しの良い学校になるためには、こうしたマナーによって好感度や信頼度のアップ、円滑な人間関係を作っていくことが大切ではないかと思う。それによって学校のイメージも当然向上するし、民間企業でいえばそういったマナー

がきちんとしている会社というのは、リスクも減る。そして労働生産性も上がる。当然、風通しが良いのでお互い誤解や衝突が減り、常に言葉を発せられるような環境になる。そうすれば、転勤してきた先生が何も言えないような状態にはならないし、ハラスメントのリスクも少なくなると思う。ぜひ一度そういった別の研修というのも今後増やしていただきたい。

もう1点、異論が出ることの大切さということも、川上先生から今回教えていただいた。私も本当にその通りだと思う。葛藤を通じたチームビルディングを経て、子どもたちが成長することになると思うのだけれども、学校訪問や私も学校で授業をさせていただく際にとっても違和感があるのは、1人の生徒が手を挙げて発言すると「賛成です」とか「いいです」と全員で答えるのは岐阜特有のものなのだろうか。同調圧力のような感じがしないでもないが、テンションで授業がどんどん進んでいってしまうと思う。目立つ子や前に出ようとする子ばかりではないと思うのだけれども、おとなしくても自分の考えをしっかりと持っている子たちが発言する場が失われてしまっているような環境でもあるのではないのかと思う。そういった授業内では葛藤を通じたチームビルディングをできないわけであって、今までの岐阜県の風習なのか文化なのか分かりかねるが、違和感を持っている先生や生徒もいると思う。多様な考え方を話していけるような環境、先生方にとっても居心地がいい学校づくりを今後さらに進めていただきたい。

○岡本 委員

伊藤委員からの発言にもあったが、その場で異論が出ること出せることの大切さに関して、自分の幼少期の実体験でもあるが、1、2年生のときの先生がみんなで行く際に「それでいいの？」と聞かれることがあった。その後先生に「こういう風に思うけど、本当にみんなそれでいいの？」ともう1度聞かれたが、それは先生があえて何か問いかけをしてくれていたのだと思う。私は人と集団で何か行うことがそんなに得意ではなかったのだが、そういったちょっと嫌だなと思うことを言いやすい環境にあったこともあり、自分が人と違う意見を言うことに違和感を感じずこれまで生きている。

逆に、経営している会社においては、社員が私の意見を全肯定してくると非常に違和感がある。ここが民間企業と学校の違いかと思うが、民間企業は一つの大きな目的に向かって人を集めているため、自分ができないことをやってくれる社員が沢山いる。私ができないことをできる社員は山の

ようにいるわけで、それゆえお互いのことを尊重し合えている。ただ学校の場合、子どもに教えるという1点に関しては、管理職の先生も新任の先生も皆さんある意味同じことを行うわけで、どうしてもそこに上下関係ができてしまうのではないかと。そうすると、川上先生がおっしゃった異論がどうしても出にくくなってしまふ。当然経験が多いベテランの先生の「若造がなに言っているんだ」というような一言でも言いづらくなってしまふし、そういった教職であるがゆえの特性というか学校であるがゆえの特性というのが一つあるのではないかと思いながら聞いていた。そういった意味では、最近は色々な方が学校に携わるようになってきているので、学校教育機関の運営協議会を含めて、教師以外の第三者が学校の中にある程度関わっていくということは、岐阜市の目指す学校の中でより必要なことではないのかなと思った。

また、皆仲良く一緒に頑張りましょうというのは非常に大事なことであるが、先ほども申し上げたように、1人でやりたい子や集団でやるのは苦手だという子はやはり一定数いると思う。学校が社会に出ていくための準備期間であり、色々な経験、トライアンドエラーをして自分の特性を一つ生み出していく場だと考えると、社会に出て当然人の繋がりはあるけれども1人で仕事をされている方も一定数いらっしゃる中で、みんなでやることも大事だし1人でやることも大事。そういう意味では、先生方や周りの大人の役割は、その子の特性を伸ばすと同時に、たまには違う方法も試してみようということで、本人のその姿勢を受け入れながら他人の姿勢も経験させてみるといったことで、お互いを認めていく手助けをすることにあり、子どもたち同士はしかり、そこに先生が入ることで、誰もが価値ある大切な存在として認めるという行為につながるのではないかなと思って聞いていた。

今でこそ多様性と言われているが、その言葉の一方で、同調圧力が強過ぎて議論を認めない、何か違うものに対して集団で危機感を持って叩きだすといったことがSNSも含めてありがちなので、もう少し自分の違いを出せるような学校というものがお互いの存在を認めることにつながるのではないかと思う。非常に難しい課題であるし、学校で出てくるのはある意味家庭や日々の子ども同士の関係の一面でしかないわけであるから、そのバックグラウンドにあるベースとなる生活の中でも、色々なものに触れる機会といった社会経験も含めて、自分と違うものにより多く触れるような時間を過ごすことが大事ではないかと思う。

○小森 委員

川上先生からお話いただいた点も含めた感想と意見の2点をお話させていただこうと思う。

まず今日お話しいただいた認知件数の見方というところで、非常に参考になった。ご指摘の通り、いじめ防止対策推進法では1, 2, 4条といった定めがあるが、法律的にはこの2条で定義しているということは、厳然たる事実である。2条で捉えていくべきという考え方の一方で、例えば4条ではいじめを行ってはいけないということで2条と4条で矛盾しているのではないかとよく言われるところである。認知件数の拾い方に関しても、川上先生の「測定できないものは改善できない」という言葉に本当になるほどと思った。この認知件数の拾い方に関しては、法律上の定義がはっきりしているにも関わらず、学校や職員さんによってどの程度の行為をもっていじめとするのかがぶれているといわれる。平成30年に、総務省から文科省へ法律の定義で認知するよう勧告があったが、現場としては、2条の定義でいじめをカウントしていくことに戸惑いがあるのだろうと思っている。でなければ、いじめが多い県といじめの低い県であんなに違いが出るわけがないと思う。そういった意味では、今回、市の認知件数のデータを提示いただいたけれども、岐阜市の取り組みを評価するにあたっては必ずしも有用なデータになっていないのではないかとというのが率直な感想である。文科省はいじめのカウントは2条で行うと言っているわけだから、2条の広い定義でカウントしようということを徹底した方がいいのではないか。そして、先ほど川上先生に示していただいたように、基本的には認知件数が多ければそれはアンテナがしっかり張れているという評価になっていくことをしっかり伝えることが必要ではないか。似たような話で、私は病院の監査に関わっているが、病院だといわゆるヒヤリハット事例、インシデント事例について、病床数に対して一定の数値が報告されることが目標とされ、一定基準数を満たしていないとそこはアンテナを張れていないという評価になる。だから頑張ってインシデント報告件数を挙げましょうというのが病院の考え方であるが、2条の定義からするとこの考え方の方が親和性があるのではないかと思う。むしろ、いじめの発見をできてないということは、学校としての取り組みに対して不安感をもっていたかといったような、それくらいのメッセージをしっかりと出していった方がよいのではないか。そのうえで認知件数を拾い上げるのであれば、意味のあるデータになっていくのではないかと改めて感じた。

2点目として、今日のテーマである誰もが価値ある大切な存在として認められる学校というところ

ろで、私は昨年から教育委員となり、教育大綱の改定には関わってはいないのだが、いじめがない学校というような考え方ではなく、価値ある大切な存在として認められる学校にしていこうという考え方は非常に良いと思っている。これは憲法の個人の尊厳にもつながり、親和性のある考え方である。お話にあったように、誰もが価値ある大切な存在という状態をどう捉えるかは難しいところだけれども、出発点としては、まず児童生徒が他人への関心を持つことではないかと思っており、その逆が無関心である。大人になれば好きな者同士、興味が同じ者同士でくっついていくことができるわけだが、大人になる前に、学校という地域から色々な人がある意味強制的に集まってくる場で、色々な経験をして多少の失敗をして大人になっていくという中においては、他人に対して無関心では教育の目的は達成できないと考えている。そういう意味では、児童生徒の皆さんの間にも一定の葛藤のようなものが必要なのではないかと思う。自分と他人の意見が違うことでその価値に気付いていく側面があり、時には多少否定的な経験や受け入れがたい感情も生じるのだろうけれども、それも含めて乗り越えて他人の価値に気づくということがあるべき姿であり、学校がそういった場であることを正面から認めていくことが大事なのかなと思った。その過程において、子ども同士の葛藤を受け入れるということは、他人に対して嫌な思いをするということにもつながるのだが、それがいじめの定義に該当することからいじめがあったとした場合に、なかなか理解が得られない保護者が入ると解決が難しくなることもあるので、それはいじめではなく子どもが成長していくための必要なプロセスだというコンセンサスを保護者との間で形成できるような動きが必要だと思う。いじめの定義によって、学校におけるそういった教育的な機能が損なわれないようにしなければいけないと改めて思ったところである。

○益子 委員

教育方法論の分野において、授業中に教師がどういう意思決定するかという授業の仕方の研究をした吉崎静夫という先生がいる。授業中に自分の予想外の反応が子どもから出た場合に授業をどう進めるかという調査をされて、授業をそのまま進める、その場にとどまって子どもたちと考える、あるいは前に戻って学習内容をもう一度復習するという選択肢を用意して調査したところ、ベテランの先生ほどそのまま進んでしまうという結果が出た。加えて、同じ単元を5回以上やった先生ほど進んでしまう。実は若い先生やその単元をあまり扱ったことのない人は、その場に留まって子ど

もと考えたり戻って既習事項の確認をしたりするのだが、この研究をベテランの先生に対し、大学院の授業や研修で話すと、少しゾッとしたという話を聞く。これは今日の話と通ずるところがあって、一般的に何回も経験したり長い間経験したりすると、より成長すると考えがちだが、その一方で、見方がどんどん確立されることにより、微細な変化に鈍感になってくるという傾向が実際にある。特に、教育の現場だと学習者は授業で初めてその単元を勉強するわけだが、先生は何回も経験したものがあって授業をするわけで、はたして毎回フレッシュな気持ちで学習者とやり取りできるのかということは、実は何回も経験を積み重ねれば積むほど難しいことになる。このように考えると、職場適応という話があったが、授業や子どもたちに適応していくことはある意味で成長であり、そのプロセスは非常に重要であるのだが、過剰にこういうものだと思ってしまうと、実はどんどんルーチンワークになってしまい、教師側の見方で子どもを固定的に見たり、授業を進めてしまったりということが起きてくる。そう考えると、一旦確立した自分の見方をもう一度見直すことができるかどうか、教師個人としていい授業ができるかどうかという非常に大きなポイントだと思う。成長すればするほどその見直しを頻繁に起こしていかなないと、ルーチンワークや依存となっていくって、子どもの微細な変化にも気付かなくなってくる。そういったことを以前現職の先生と議論したことを思い出した。経験と成長という意味である。

学校組織というもので考えると、以前は職員室の先生方のコミュニケーションで自分のやり方や見方を見直すことができていたのではないかなと思う。例えば、かなり昔ではあるが宿直制度というものがあり、ベテランの先生が学校に泊まる際には若い先生達が一杯やろうと集まってそこで話をする機会があった。また、以前は公共交通機関で通勤することが主流で、食事を共にして帰るという機会も多くあったが、実はそのインフォーマルなコミュニケーションをする機会が教師という職業の中でも減っており、自分の確立した見方を見直す機会も組織レベルで少なくなっているような気がする。そうすると、異論をお互いに出したり自分の見方を疑ってみたり、他者の違う見方を自分に取り入れてみたりするという、以前確保されていたインフォーマルなコミュニケーションを、限られた時間や働き方改革の中でいかに確保するかということも非常に重要だと思う。そのうえで、川上先生がおっしゃったような学校組織作りを実現していくために、先生の勤務時間を減らそうと言われているこの段階でどのような点に気を付ければそういう意識作りや自分の見方を見直すきっかけになるようなコミュニケーションが行えるか、それを実現する条件について、川上先生の

お考えがあればお聞きしたい。

○川上氏

先ほどの岡本委員のお話にもつながるところがあると思う。仕事が重なることで上下関係が固定化されやすく、ルーチンワークになっていくことに割と近いが、実は、新しい取り組みを行うことが益子委員のおっしゃるようなことを創発するのに向いていると思う。最近の事例で言うと、例えば、GIGA スクール構想前後で学校に ICT 機器を入れていきますということがあった。あの機会が組織作りに大変プラスになっているという話をいくつか聞く。今まで通りの授業の方法で行っているとどうしてもベテランの方が教える側になって若手は聞く側になるのだが、新しいデバイスが入るとなるとその関係が逆転する。若くて手先の器用な先生がどんどん導入していく中で、若手の動きを抑圧するのではなく、わからないから教えてと腰を低くできるガードの低いベテランのような先生が学校の中に 1 人、2 人キーパーソンでいると、若い先生がそれを意気を感じて新しい機器の導入も頑張るという好循環が生じ、学校が非常に活性化する。全国的に起こり得た、新しい取組で組織が活性化する事例として ICT の話をしたが、おそらくいくつかあり得る話だと思う。仕事の時間の中で行うヒントの一つとしては、新しいことになるべくチャレンジをしてみるとか普段のやり取りの中でできてしまったベテランと若手の関係を少し逆転できるようなものを取り入れてみるのがとても面白いのではないかと思う。

○益子委員

岐阜県の県立学校がコロナ禍でオンライン授業を始めた際、これまで ICT を使ったことのないベテランの先生がパワーポイントを勉強し、大変良いプレゼンテーションを作りオンライン授業をするようになった。オンライン授業をしなければいけない状況の中で、積極的に若手の授業を見学し、複数人でオンライン授業を行うことで、あっという間に学校の中で ICT 活用が広まったという話を思い出した。やはり教えたのは若手の先生で、ベテランの先生はそれまでほとんどパワーポイントを使ったことはなかったのだが、コロナ禍以降もベテランの先生の方が積極的に使っているとのことだった。

○教育長

大学の先生が「価値ある大切な存在」をどのように分析されるのか、大変勉強になった。

作家の灰谷健次郎の、生きるということは自分につながるもう一つのいのちを知ることだという言葉が好きで、自分以外にもう一つの命があってつながっていたらどう関わるか、それを知ることが生きることだと思っている。価値ある大切な存在という大綱の文言は、哲学的で宗教的であるが、極めて深い言葉であり、教育長になってからもこれがベースにある大綱を本当に大事に、振興基本計画の基となるバイブルとして動いている。市長は、あなたには価値があるという文言を入学式の祝辞に必ず使われ、卒業式のメッセージにも毎回価値という言葉を入れてお話をされているので、教育長としてもすごく大事にしている。

1 点目に、学校安全支援課が暴力行為や SNS の問題を提示したが、コロナ禍で幼児期にあった子どもたちの問題行動が増えているということは、その年齢層において発達段階で人との関わり方を十分学ぶことができなかったということだと単純に思っている。放っておけば問題が起きるのが人間で、だからこそ大人や教師との関わりが大切だ。岐阜市には二つの市立幼稚園があるが、加納幼稚園の例で言うと、子どもたちが卵から孵ったアゲハ蝶をなぶりものにしている様子がある。それはいじめているのではなくて、子どもたちは青虫と一生懸命遊んでいるのだけれども、青虫の側からすると手の上に乗せられるのはいい迷惑である。そういうふうにして、青虫が死んでしまったときに自分本位でかわいがるという行為が虫を死なせてしまうことにつながるのだと、一つ一つ関わりを学んでいくことが教育だと思う。だから SNS も人と繋がる喜びをと思えば、その先にあるものを教えることが大事である。

2 点目は、異論について皆さんからお話がでているが、私もその通りだと思っている。単純に、傷つけられて良い子はいないし、傷つけて良い相手はいないという根本となる哲学を子供たちにどうやって擦りこんでいくかが大切である。津久井やまゆり園で 19 人が亡くなった際に、障がい者は生きている値打ちがないという言葉があった。また、京都アニメーション放火殺人事件の犯人を医師団は必死になって助けた。これは生命の尊厳の根幹にあることで、自分以外の人を命をどう見るのかということ、教育の中でどれだけ押さえていけるか、理解させていけるかが勝負だと思っている。

3 点目は、それらのことを踏まえてこれからの学校で自分と異なる自分以外の人とどう繋がるの

か。やはり共生の体験と対話が、これからの未来の学校をつくる時のポイントだと思っている。義務教育学校ができて、異年齢での活動を通じて、待ってやる、遊んでやる、負けてやる、頼る、甘える、慰める、懂れる、真似る、勇気づける、受け止める、頷くといった人と人が関わる作用のようなことが随分可視化されるようになってきている。そういったことはとても大切であり、子ども同士が文化を作っていくところに義務教育学校の面白味がある。そのように考えながら、みんな違ってみんないいという金子みすゞの詩は、違っていけばいいということを使ったわけではなく、みんな違ってみんないいの次にあるものを考えることが生きることなのだと伝えていると思うし、そういった教育を展開しようと思うと、川上先生がおっしゃったような誰もが価値ある大切な存在であるということ自体を発達段階に応じて学んでいくことと、その価値ある大切な存在とどう関わっていけばいいのか学ぶことが大事だと思いながら聞かせていただいた。

○市長

先ほど岡本委員が1人でやりたい生徒もいるという話をされたが、私も先天的にはそちら側で、今こういう仕事ができているのは、後天的に相当な自己改造をして、チームビルディングを学んだ変化の結果である。

川上先生に1つご質問をしたい。現在、私は絵本の読みきかせをして30園近く幼稚園を回ってきた。中学校も回っており、幼稚園の子どもたちと同じ子ではないけれども、中学生の子どもたちをある意味で見比べながら、色々なことを自分なりに感じている。幼稚園では、市長に絵本を読んでもらったから、お礼に合唱をしようと元気に歌ってくれるが、そこに岡本委員の話をリンクさせると、あの幼稚園の元気な子どもたちの挨拶や歌う姿というのは、子どもたちの本質なのだろうか。子どもそれぞれに心の成長、発達があるが、実は幼稚園のときから集団でいることに対して居心地が悪いとか感じている子どもたちもいるのだろうか。岐阜市では、教育委員会の中に幼児教育の担当課を作り、未就学期間からの子どもたちの学びや育ちが重要ということで取り組んでいる。我々はどうしても義務教育として小学校や中学校にフォーカスを当てがちであるが、幼児期の教育でしっかり押さえておく小学生そして中学生の育ちに良い方向へつながっていく学びがあるのではないかと、幼稚園との色々な連携ができるのではないかと思い、そのヒントをいただければありがたい。

○川上氏

幼児教育の専門家ではないが、市長のおっしゃる通りで、おそらく自我の発達段階であるから、幼稚園の子どもたちの姿が嘘や同調圧力に屈した姿ではないと思う。その中で、例えばみんなで遊ぶ時間に少し外れたところで石を拾ってみたり、葉っぱを集めたりしている子をどう見立てていくかというところにポイントがあるように思う。当然個人の発達の話になるので、個人差が出てくる。ですから、先ほど益子委員もおっしゃったように、ベテラン保育者ほど、この年齢層でこの動きをするのは定型だというような話になりやすいと思うが、一方で個性としての受け止めと、ある種の葛藤が必要だろうと思う。ベテラン保育者の話を聞いていても、子どもの動きに対しての葛藤を大変豊かに語られることがあり、幼稚園と中学校という10年近く違う発達段階なのでコントラストがはっきりと見えると思うが、先生方がそれぞれ見ている学年の中それぞれで、葛藤含みの個々の見取りっていうのを大事にしていく必要がある。そういう意味では、見立ての違いを葛藤として引き取ることで、例えば保育者や教員の見取りが豊かになっていく。見取りを豊かにしつつも、新しく見た場面に対して、これは特異なケースだから関係ないとするのではなく、自分の見方をアップデートするきっかけづくりにすることが大事になってくる。

○市長

幼稚園を回るといつも気になることがある。1人で違うことをしている子もいれば、抱きついてくる子もあり、まさに個性を発揮している様子があり大歓迎なのだが、先生方が市長の訪問に合わせて子どもたちに対して一律の動きを求めること、秩序を保とうとするのはもったいないと思う。これはおそらく先生方の葛藤になると思うが、ある程度子どもたちの良い部分を伸ばしてあげていくと、おそらくその子どもたちは自分が感じていることを表現するし、成長とともに、その表現の仕方が私の目の前に来て絵本につっこみを入れるというところから、自分の思いを語っていくというように変化していくのではないかな。そういったことが幼児教育の中にもっと広がるとよいと思う。

幼稚園、小学校、中学校という違いはあるが、何か子どもたちに関わる大人の関わり方に共通するものがあるのではないかなと思うし、これを突き詰めると親子の関係に行き着いていくのではないかな。親の子を想う気持ちが、逆に子どもたちの色々なことを自由にのびのび行う機会の減少になっ

てはいけないと思うし、中学生にも思い切ってやってみたらどう、と失敗のすすめを説いている。良い結果を出そうと思うあまり、自分の中で想定したできる範囲のことに留まろうとしてしまっている子どもたちが多いのではないかと感じる。

○総括

教育大綱の基本のところでは川上先生からたくさんのご示唆をいただき感謝申し上げます。

伊藤委員は改定当時のことをよくご存知で、大変懐かしい話をシェアしていただいた。改定前後の教育大綱の違いは、子どもたちへの光の当て方である。以前は才能開花教育ということがかなり前面に出ており、色々な才能を持つ子どもたちの良い部分をどんどん伸ばしていこうという一方で、不登校やいじめといった、自分の才能を自分の中でしっかりとつかみきれず色々なことに葛藤している子どもたちに光がなかなか当たっていなかった。そのため、いじめ重大事態をきっかけに、そういう子どもたちにしっかり光を当てようということで教育大綱が出来上がっている。才能開花教育を否定したわけではなく、子どもたちへの光の当て方に大綱の議論があった。川上先生のお話に価値を拾い合える組織という言葉があったが、まさに自分の能力を伸ばして才能を開花させていく子どもたちの価値や考え方をしっかりとカバーし、葛藤しながら一歩踏み出そうとしていたり、立ち止まりながらエネルギーを貯めていたり、あるいは声が出せない子どもたちにも光を当て、それを子ども同士も、先生と子どもたちも、親子でも地域でも、お互いが光を当てながらカバーし合っていくことが重要である。

慣れや違和感を感じなくなるというキーワードがあったが、自由の相互承認の感度を高める教育が大綱の原案であり、感度を高めるという言葉は大事だと当時も議論した。時代とともにずれてくるものがあると思うので、先生も子どもたちも私達も常に自分たちの感度が高まっているのかこれからも意識しながら、大綱に基づく各政策についてもどうアップデートしていくかということを改めて先生からご示唆いただけたと受けとめている。今年度もしっかりと議論を深め、それを具体的に施策として取り組んでいきたいと思う。